

19) オドリコソウ＝踊子草

オドリコソウはシソ科の多年草で、日本各地の低山帯の林内や路傍に生え、ときに群生することも多い。日本以外では朝鮮半島や中国、樺太などにも広く分布する。オドリコソウ属は世界には約 40 種があり、日本では帰化植物のヒメオドリコソウ(学名は『*Lamium purpureum*』)が最近急速に生存範囲を広げている。この植物はヨーロッパ原産の越年草で、明治時代の中ごろ、日本に渡来する一方、東南アジアやアメリカにも分布を広げ、今では在来種を凌駕して、群生することも少なくない。3~4月ごろに花を咲かせるため、まだ花の少ない三月初旬、ミツバチの蜜源植物として価値が高まりつつあることは見逃せない。しかし種子には『[エライオソーム](#)』(01-02-08 ヤマブキソウ参照)を持っており、アリが種子を運んでゆくため、またたくまに全国に広がりつつある。さてオドリコソウの茎の断面は方形をしており、高さは30~50cmほどになる。葉は卵形で先は鋭く尖って対生し、長さは5~10cm、葉縁には鋸歯があり、葉全体が縮れて皺がある。4月頃、淡紅色または白色の唇形の花を葉腋に数輪ずつ付け、花は上段の方から下段へと咲き降りてゆく。和名の由来は花の形を、笠をかぶって踊る踊り子にたとえたものである。これを虚無僧に見立ててコムソウバナと呼ぶ地方もある。またオドリコソウの古名は波見(ハミ)ともいい、これは食(ハ)みで、花の形が口を開けた蛇に見えるためともいう。しかし波見は後述する同じシソ科のタツナミソウ(立浪草)との関連がある名称なのかもしれない。タツナミソウの花はまさに波頭に見える。オドリコソウもこれに似た花で、形はよく似ている。別称としてはオドリグサ、オドリバナ、ジジボグサ、チチバナ、ツツバナなどで、アイヌではセタハイモス(犬イラクサの意味)と呼んでおり、独特の地方名も多い。学名は『*Lamium album*』で、属名はギリシャ語の喉を意味することばに由来する。花の筒が長いので喉に見立てたのだろう。また中国での呼称は『野芝麻』である。

シソ科の植物はもともと食用になるものが多く、このオドリコソウもその例外ではなく、若芽は食用になり、湯搔いて和え物やお浸し、酢の物、天ぷら、油いためや味噌汁の具などとして用い、花は熱湯で茹でて、酢の物などとして食用にした。また中国では古くから民間薬として用いられ、月経不順や、腰気、泌尿器系疾患に、オドリコソウの花を乾燥させたものを煎じて服用した。腰痛にもよく、乾燥させたオドリコソウの適量を、木綿の袋に入れて、薬湯料として入浴すると効果があるという。一方、打撲傷や腫れ物には、全草を濃く煎じた液で湿布するとよく、全草を咯血や吐血の薬としても用いられていた。その有効成分はオドリコソウ独特の香に深く関わる『テルペノイド』のほか、出産促進作用があるといわれる『スタキドリン』、その他のアルカロイド(05-02-00 参照)、さらには、強い容血作用を持つサポニンなどで、オドリコソウは血行をよくし、動脈や子宮を収縮させる効果があったという。このため古くから妊婦の保健薬とも言われていた。



白花の踊子草は身近なところにあった。可愛い花である(東京都港区浜離宮庭園)。



紅花の踊子草、浜離宮庭園ではよく見られる花である(東京都港区浜離宮庭園)。



小石川植物園の片隅にはこんなオドリコソウがひっそりと咲いていた。



近縁種の帰化植物ヒメオドリコソウ。学名は『*Lamium purpureum*』で、もともとはヨーロッパ原産である。今では北アメリカや東アジアにも広く帰化している(相模原市緑区)。



ヒメオドリコソウは北米では侵入植物種として扱われている(相模原市緑区)。

[目次に戻る](#)